四十八時間の告発

笹沢 左保

四十八時間の告発

定価　五〇〇円

昭和四十七年五月十日　印刷
昭和四十七年五月二十日　発行

著者　笹沢左保
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社

〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒八〇一　北九州市小倉区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町

印刷　東京ベル印刷
製本　正文社

0093—400059—7901

目次

四十八時間の告発……5
幻の殺人……61
顔のなかの顔……103
日暮れの男……137
雪の女……183
冷酷……225

装画　鶴岡義雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四十八時間の告発

四十八時間の告発

毛利十四郎は、三点セノトが据えてある廊下へ出てみた。窓のガラスの外は、いかにも暑そうであった。日がカノと照りつけていて、眩しいほどである。視界には緑が益れていて、すぐ目の前に急角度に傾斜した山の稜線があった。川のせせらぎ、滝の音とともに、蟬の声が聞こえていた。

山の形がいい。夜になって山の端に月でもかかれば、まさに舞台の背景である。いかにも奥伊豆らしい眺めであった。こんなにのんびりてきたのは、ここ数年ぶりだった。夏休みに五日間の休暇が、ようやく取れたのであった。一昨日も昨日も、終日寝て暮らした。今朝も十時になって、ようやく目を覚ましたのである。

毛利十四郎は椅子にすわって、タバコに火をつけた。日射しの強い外の景色に、違和感を覚える。室内は冷房が利いていて、寒いくらいだからだろう。この奥伊豆の大滝温泉のホテルは、三カ月も前から予約しておいたのだ。大滝温泉は伊豆急電鉄の河津浜から、車で二十分ほど天城峠寄りにはいったところにあった。

ホテルの閑静な大庭園があり、その中を河津川の上流が流れている。滝の名所でもあった。あちこちに、露天風呂がある。滝のすぐ近くにあったり、深い洞窟の奥に湯が湧いていたりだった。プールもあって、子どもたちは退屈することを知らなかった。

毛利十四郎は、妻の春恵と二人の子どもを連れて来ていた。子どもは上の研一が六つ、下は娘で真白という名前だった。毛利十四郎は三十七歳、妻の春恵は三十二だから、まあ家族構成としては標準型である。家庭の内容も、恵まれているほうだった。

毛利十四郎は、電気工学の技術者として、『トーキョー自動車』の開発研究所に勤務している。一流とされているトーキョー自動車の開発研究所で、彼は電気関係のナンバーワンと目されていた。現在は新しい蓄電池の研究で、注目を集めている。

サラリーマンとしては、この上もないエリートである。日本の自動車工業界の新しい頭脳、と称されている誇りがあった。高給取りでもある。春恵は妻として、文句のつけようがない女だった。夫婦仲もいい。子どもたちは、健康であった。

この平和な家庭に、不満を感ずるはずがなかった。はっきりした根拠はないが、この幸福がいつまでも続くような気がする。社宅住まいだが、自分の家が欲しいといった余分な欲望は湧かなかった。いまのままで、十分なのである。

しかし、百パーセントそう感じているのは妻の春恵であり、二人の子どもたちであった。毛利十四郎も普段は、心から満足している。それは、忌わしい事実を忘れている間に、限られていた。五年ほど前から、忘れている時間のほうが長くなった。

最近では、殆ど思い出さなくなった。思い出すのは、それなりの理由があったときの数日間であった。それも、何日かたてば、いつの間にか忘れることができた。だが、完全に記憶から消えたわけではない。いつまた思い出すか、わからなかった。

そのことが記憶に甦ったら最後、毛利十四郎はいつもの彼ではなくなってしまう。心がまったく、不安定になる。毛利十四郎と彼の分身が、激しく争う。将来に絶望し、身の置きどころがなく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なる。現実が幸福なだけに、彼は不幸のどん底へ落ち込む。同時にその苦悩を妻子や同僚たちに気づかれまいとして、毛利十四郎は更に苦労するのであった。

「ただいま」

と、研一の声がした。

「まあ、涼しい」

続いて、春恵の若やいだ声が聞こえた。外から帰って来て、室内の冷房が肌にしみたのだろう。毛利十四郎は立ち上がって、寝室から広い洋間へ出て行った。水着姿の研一と真白が、もうテレビの前にすわり込んでいた。

「起きていらしたの」

春恵が、笑いかけて来た。覗いた歯が、真っ白であった。

「うん。みんなが出て行ったのには、気がつかなかったけどね」

十四郎は、しげしげと妻の身体を見やった。春恵は、ビーチ・ウェアを脱いだところだった。オレンジ色の水着姿である。春恵の水着姿を見るのは、結婚して以来初めてであった。それだけに、十四郎の目には刺戟的で新鮮なものに映した。

思ったより均整がとれていて、瑞々しい身体つきをしていた。胴が細く、これほど胸から腰へかけての線が美しかったとは、十四郎も知らなかった。脚も形がいいし、尻が上がり気味に位置していた。成熟しているが、まだ崩れは見られない女の身体だった。

「プールで、一時間ばかり遊んで来たの」
春恵は髪の毛を解いて、軽く頭を揺すった。長い髪が、背中に散った。だいたいが若く見られる知的な美貌だった。水着姿だと、どう見ても二十七、八であった。
「そう」
ソファにすわって春恵を見守りながら、ここへ来てまだ一度も妻を抱いてないと十四郎は思った。
「わたしの顔に、何かついているかしら」
春恵はソファにビーチ・ウェアを敷き、その上に腰をおろした。
「凄く、魅力的だよ」
十四郎は妻の肩に腕を回して、小声で言った。
「何を、急に……」
春恵は照れ臭そうに笑って、夫の腕から逃げようとした。そうさせまいとして、十四郎は更に春恵を抱き寄せた。春恵は、夫の胸に凭れかかった。
「いま君を見ていて、胸がジーンと痛くなった」
十四郎は、軽く唇を触れ合わせた。
「口ばっかりじゃなくて、その証拠を見せて欲しいわ」
春恵は、悪戯っぽく目で笑った。

「今夜ね」

十四郎は、本格的に唇を重ねた。待っていたように、春恵は彼の舌を迎え入れた。子どもたちは、こっちに背を向けてテレビに見入っている。十四郎の肩を摑んでいる春恵の指に、力がこもった。

考えてみれば十四郎は、夜の夫婦生活てあまり夫としての義務に忠実てはなかった。開発研究という仕事は、性的欲望を淡泊にするのかもしれない。もともと、十四郎は男女の行為に対して贅沢てあった。心身ともに充実感て一致しないと、その気になれないのだ。

新婚時代をすぎると、夫婦の交わりは量的にかなり減った。最初の頃は、春恵のほうからそれとなく催促することもあった。だが、十四郎がそれても応じないとわかると、すっかり諦めたようたった。だからと言って、性的不満から夫婦の間に争い事が生ずるようなことはなかった。

春恵がヒステリー症状を見せることはないし、いつもカラノとしていた。そういうものたと思えば、不満は感しないのだ。環境に順応しやすい女なのに違いない。それでも、一カ月に数回の行為には、芯から燃え上がって別人のように狂態を演する春恵だった。

「さあ、着換えをしましょう」

春恵はテレビを消すと、研一と真白を立ち上がらせた。そのまま、浴室のほうへ去って行った。十四郎は、テーブルの上の朝刊に手をのばした。のんびりすると、俗世界のことには興味がなくなる。どんなニュースがあるか大した関心もなく、十四郎はあくびをしながら新聞を広げた。

社会面のあちこちに、目を走らせた。いつもと同しようなことが、報じられている。公害への怒り、交通事故、海や山での遭難などてある。十四郎は公害問題についての記事だけを、丹念に読んだ。公害問題には、関心があったのだ。

それは十四郎自身が、公害防止に取り組んているからてある。トーキョー自動車ては、車の排気ガス除去に力を入れていた。現在、開発研究所ては、その点に総力を結集している。対策は、二本立ててあった。一本は、排気ガス除去装置の研究完成である。

もう一本のほうは、ガソリン機関並みの性能を持ち値段も同しくらいで市販できる電気自動車の、開発と完成てあった。そのために一つのグループが、特殊な蓄電他の開発を急いでいる。十四郎はそのグループの、中心的な存在てあった。

電気による動力は弱いとされているが、そうとは限っていない。蓄電他によって、動く機関車もある。蓄電他は、潜水艦の動力にも使われる。列車内の電灯照明の電源としても、使用されている。鉛蓄電他は、あらゆる直流電源に役立っているのだ。

要はガソリン機関の規模て、しかも同等の動力を出せる蓄電池の製作が可能かどうかということである。だが、それは決して、不可能てはなかった。十四郎たちのグループでは、この秋から特殊装置による特殊蓄電池の実験段階にはいる予定だったのだ。

新聞に載っていた公害問題は、『四エチル鉛』製造工場の煤煙、悪臭、降下灰などに関することであった。十四郎の専門外てある。彼は、社会面の左隅へと目を移した。とたんに、十四郎は中腰

になっていた。顔から血の気が引いて、新聞を持つ手が震えた。

何よりも見たくないものを、目にしたのであった。記憶に埋没していたことが、たちまち彼の頭の中で膨脹した。それは、一種の発作であった。忘れていたことを思い出すと同時に、たったいまでの幸福も平和も雲散霧消して、十四郎の苦悶が始まるのだった。

そこには、『丸森事件いよいよ最終判決』という見出しがあった。丸森事件の最終判決が明後日の八月二十日、最高裁判所で下される。弁護団も最後の打ち合わせをすませ、全国から『小松原被告を守る会』のメンバーたちが続々上京中である。と、記事は、簡単なものだった。

十四郎は、新聞を投げ出した。視界が、薄暗くなった。彼はソファに、ぐったりとすわった。いつかは来る日だと、わかっていた。しかも、地方裁判所の一審や、高等裁判所の二審とは違うのだ。今度は、最終判決なのである。

「あなた、どうかなさったの。顔色が、とても悪いわ」

部屋へ戻って来た春恵が、声を張り上げた。

「ちょっと、眩暈がしただけたよ」

毛利十四郎は脚を組みながら、弱々しく笑った。

十年前のことになる。

その頃の毛利十四郎は、まだ独身であった。春恵との仲は恋人同士らしい雰囲気になっていた

が、結婚を具体的に考える段階には至ってなかった。トーキョー自動車にも入社していたが、当時の彼は本社の技術部に所属していた。

四月の末であった。十四郎は中条敏彦と、東北地方を旅行した。中条敏彦は大学の一年先輩であり、その頃もうトーキョー自動車の開発研究所に勤務していた。それから二年後に、十四郎を開発研究所に引っ張ってくれたのも、その中条敏彦であった。

現在も中条敏彦は開発研究所にいて、企画主任のポストについている。彼は独身主義で、三十八になったいまも妻子はいない。若い工学博士だが、身体にどこか欠陥があるらしい。その欠陥については、親しい十四郎にも打ち明けようとしなかった。

また、中条敏彦と春恵は、従兄妹同士であった。十四郎は中条敏彦を通して、春恵と知り合ったのである。十四郎にとって中条敏彦は、よき先輩であり上司であり、尊敬すべき親友であり義理の兄みたいなものだった。肉親のいない十四郎には、最も親しく頼り甲斐のある中条敏彦だったのだ。

その中条と一週間の休暇がとれた機会に、東北地方へ旅に出たのであった。十年前の話だが、まるで昨日のことのように、その行程について記憶していた。

盛岡、宮古、陸前高田、石巻と泊まって、いよいよ旅の最後の夜を迎えた。仙台に泊まるのがまあ常道だろうが、地方へ来たら都会に魅力はない。ては、仙台の近くてどこか情緒のあるところはないか、ということになった。そのとき中条敏彦が、丸森に泊まることを思いついたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com